
白雪姫 R

レイニーシュライン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白雪姫R

【Nコード】

N3846D

【作者名】

レイニーシュライン

【あらすじ】

前作「白雪姫」で、原作でいう冒頭部分でいきなり王妃を返り討ちにし植物のように穏やかな生活を送っていたはずの白雪。しかし、物語は修正されようとしていたとかなんとか、ばっちゃんが言った。

R

それは、どことも知れぬ世界の果て。
それは、いつとも知れぬ時間の果て。

近くて遠く、遠くて近い。

遥か過去で、遥か未来で。

上もなく下もなく、右もなく左もない。

進むべき前もなく、退くべき後もない。

色もなく音もなく、味もなければ匂いもない。

触れた感触はなく、動かした感覚すらもない。

言い換えるならばそこには、無限があった。

ただひたすらに幻想だけが、そこにあった。

すでに終わった、どうしようもなく終わった、最初から終わっていた物語もそこにあった。

すでに終わって、どうしようもなく終わって、最後まで終わっていった物語はそこにあった。

完全なほどに敢然と、無上なまでに無情に、簡潔に完結した後は、
そこで生死すらなく、静止し続けるはずだった。

だがそれを、再び動かそうとするものたちがあった。

誰も見向きもしなくなった過去の物語を、無限の未来へと凍結させられた「めでたしめでたし」で終わった世界を、揺り動かそうとする者たちがあった。

どことも知れぬ世界で、それらは囁きあう。

その声は七人。

「あまりにも杜撰な結末だ」

「幻想に果てはないが、しかし物語はいずれ必ず終わる」

「だが必要なのはただの完結ではない。意味のある完結だ」

「然り。真の完結たるには、あまりにも歪だ」

「欠けたるカケラは多くはない」

「されどあまりにも大きなカケラだ」

「我々の存在意義を大いに揺さぶる 否」

「それ以前に存在そのものが、ない」

「幻想に定型はないが、物語は固定だ」

「少なくともその名を冠するのであれば、然るべき物語としてあるべきだ」

「左様。喜劇であれ悲劇であれ、鍵となる存在は不変であるべき」

「この物語は間違っている」
ソシザイ

「この物語は間違っている」
シナリオ

「この物語は間違っている」
ウンメイ

「この物語は間違っている」
セカイ

「この物語は間違っている」
ゲンソウ

「この物語は間違っている」
ケツマツ

「この物語は 間違っている」
モノガタリ

「ならばやりなおそう。間違いを正そう。」

白雪姫を、もう一度」

R (後書き)

小説系ブログ「スナーク狩りにも雨は降る。」もご覧いただけます。
興味のある方は是非そちらもご覧ください。

URLは<http://d.hatena.ne.jp/rainyshrine/>です。

Dopey

それは、あるうらかな午後のことでした。

お城の傍には、深い深い森があります。その森には多くの動物が住まい、清らかな水の流れる泉があり、妖精たちが戯れ、四季の木々や花が全て調和を保って同時に栄華を誇っていました。そう、それはそれは貴重で、資源に溢れる素晴らしい森です。

磁場が完全に乱れきり、ところどころ空間が振れているせいでも、位置磁石も測量も通用せず、場所によって温度や湿度がまるで違い、更にその環境に適応するため独自に進化し、生態系として魔法を扱う動植物が蔓延り、悪意の有無に関わらず過激な妖精精霊その他諸々の悪戯により被害は甚大で、奥地は建国以来いまだに（一般の）人跡未踏を記録し続け、周辺部は国内有数の「背伸ばしスポット」（自主規制的表現）になっていて、長さよりも太さのほうがあるんじゃないかというくらい図太い神経をお持ちの現国王陛下でさえあのかばかりはここで背を伸ばしあそばされたという、ひたすらにデンジャラスなことを除けば、実に素晴らしい森でした。

その森をなんでもないふうに、なんでもないのでしよう、毎日のように散策に訪れるのは、この国の第一王女、つまるところお姫様であらせられるところの、白雪姫様シラユキヒメでした。

夜のような黒髪に、雪のような白肌に、そして血のような身も凍る深紅の瞳。そのあまりの美貌はしかし、あくまで観賞用のそれではなく、人間としての白雪姫を見る場合、ずばりいつて「人間じゃねえ」でありました。人間としてみるとかいつておきながらなんです、しかし、この大ナイカホア及び東西南北中央グレートイナモデント島及びンネヤデンナ諸島共同独立連合社会民主主義人民共和連邦合衆首長共産帝国（第8970113回国名選考国民審査大

会決定の第138次国名)の国民にとって、白雪姫は人間ではなかったのです。別に、青い血が流れている生まれながらのご貴族様とかそういうことなく、現人神というわけでも、まあ、さわらぬ神になんとやらの神様では在るかもしれませんが、一応なく、純粹に、ただひたすらに純粹に、「人間じゃねえ」と思っていたのです。悪意すら敵意すら、挟む余地もなく。まあ、殆ど飾りの国王陛下は別として、すでにお亡くなりになられたと思われ、お亡くなりになられたものと書類上記載され、お亡くなりになられたのだという発表があつてお亡くなりになられたのだという噂が既成事実的に広がってお亡くなりになられたのだと国総出でもつと幸せな現実へと目をそむけている前・お后様である故・赤雨王妃様アカサメの頃からして、「人間じゃねえ」という評価は一般的なものでしたし、赤雨王妃様自身も舞踏会で生意気抜かした、気が強いことで有名な公爵夫人をも失禁させるような声と王氣(オーラ)で「あたしのご先祖は魔王様、あたしは大魔王、よろぴく」などと公言してはばからない方でしたから、その「人間じゃねえ」度も伺えるものです。人格的に云々という以前に、白雪姫も赤雨王妃も一個の生命体としていささか人類を超越しすぎていたのです。

まあ、そんなことはどうでもよいのですが、あるうらかな午後の森のことだったのです。

白雪姫がいつものように、揠れた空間を散歩しているときのことでした。

白雪姫は、目の前にある光景に、よほど凝視しなければわからない程度に、目を見開きました。その程度の反応でも、白雪姫の表情が変わるなどということは滅多にないことでした。もしもお城の兵隊たちが、城下の民草が、そして国王陛下がそれを見たならば、思わず今日は空から飛行ストーンの力で女の子でも降るんじゃないのかしらんと空を見上げたことでしょう。それぐらい、天変地異のよ

うな反応だったのです。嘲笑うことはあるかもしれませんが。不愉快気に眉をひそめることはあるかもしれませんが。しかし、白雪姫が驚愕するようなことなど、いままでただの一度だってなかったのです。

その史上絶無にして絶対皆無の驚愕をもたらしたものの。

白雪姫の視線を、この世の全てをつまらなそうに、退屈そうに、睥睨するでもなくただひやりと温度なく眺めるその瞳が黒く淀んで受け止めました。

黒く豊かな髪。黒で統制されたドレス。飾り気なく威厳もなく、味気もなく色気もない、艶のないひたすらの黒。反射という反射を忘れてしまったかのような黒。ただ、肌だけが白くそこに浮き出ていました。

「何故、という顔をしているね。」

私が城の庭ともいえるこの森にいてはおかしいかな。

義娘、白雪姫」

そう、この棒読みで三カメにむけてそんなことをのたまうものの名は

「お前は私が殺したはずだ」

クロギリ
黒霧、といました。

D o p e y (後書き)

小説系ブログ「スナーク狩りにも雨は降る。」もございます。
興味のある方は是非そちらもご覧ください。

URLは<http://d.hatena.ne.jp/rainyshrine/>です。

Grumpy

「お前は私が殺したはずだ」

そんな古典悪役的台詞を大真面目に吐いてしまった白雪は、これでも大変驚いていました。詳しいことは前作「白雪姫」をご覧いただければわかると思いますが、そうです、黒霧は白雪暗殺を（セオリーだからという理由で）目論み、あっさりと返り討ちにあってしまったはずなのです。実は生きていたなんてことがないように（自主規制）したのですから当然生きているわけもなく、よしんば何らかの方法で蘇生したのだとしても白雪が気づかないはずはなかったわけで、これは本当に不思議なことでした。

「それはお前の暗殺に失敗したときの私にこそ相応しい台詞だと思っ
うけれどね。」

まあ、なににせよいま、こうして生きているのだから、仕方がない。

殺されたものが再び復活してくるなんていうのはセオリーどおり
だろう？」

どうやら黒霧は、この現象に関して説明する気はないようです。
セオリー、お約束、そう言った言葉で不思議を不思議のままにこり
押しで処理する気満々のようです。まあ、いくらシリアス気取って
も、どう足掻いたところでやっぱり前作「白雪姫」の続編ですから、
案外「ギャグマンガでは人は死なない」みたいなノリなのかもしれ
ません。

「……………」

白雪は原因に関しては、詳細を知ろうとすることを放棄したよう
でした。事態が発生してしまった今、大切なのはそれに対する対応
なのです。ことは常に進行しているのですから、いつまでもつまら
ないことに引っかかっていては取り残されてしまいます。

白雪はとりあえず、現状を打開すべく、いくつかの選択肢を脳内

で展開しました。

1．殺す。

2．死なす。

3．始末する。

「ふむ、物騒な選択肢を思いついたような顔だね、白雪。

しかし、少々お待ちなさい。

別に私も、あえていま、お前をどうしようとは思っていないから」

「……………」

あっさり見抜かれました。

まあしかし、能力ばかり高くて情緒の足りない、スタンドで言えば遠隔自動操縦タイプみたいに、実は行動が単純な白雪でし、妙な先入観さえ捨て去れば、割とわかりやすい性格でもありました。一応の義母である黒霧としてはわかって当然といえは当然なのかもしれない。

さて、何もする気はないといった黒霧ですが、勿論白雪は信用していません。その証拠にいまも、艦砲射撃のような極めて威力の高い魔術の構成をちらつかせていますし、黒霧も黒霧でそれに対してカウンター的なスキルをなにやらしっかりと準備しているようです。表面上、一応会話というスタンスを取っていましたが、お互いの真っ白だったり真っ黒だったりするお腹の中身をわかっているだけに、一触即発、次の瞬間には流れ弾がお城を半壊させても可笑しくないような臨戦状態でした。

「まあ、警戒は好きなだけしなさい。

いまはどうこうする気はないが、

いずれどうこうしようと企んでいることは確かなのだから」

しれっとそんなことをぬかしやがりました黒霧に、白雪は選択肢1をえらび、近距離パワータイプも真っ青の威力の熱光線をタメなしでぶちかました。当然のように黒霧もカウンタースキル発動、きらぁん、とATフィールドもとい橙色の障壁を展開して、弾き返

してしまいました。はじき返された熱光線があらぬ方向へと伸びていき、熱照射によって急激に土石その他が蒸発して爆発を起こしました。きつとそのとき聞こえたような気のする悲鳴及び「またか！」という悲痛な叫びは、ジム・ポール曹長さん（113歳）がまたもや流れ弾に直撃なさったからでしょう。兵士たちもはや日課の1つとして感じている担架による運搬作業をこなしていきます。

「相変わらず単純なようだね、白雪姫。」

近年はツンデレとかいうのが流行っているそうだから、

多少素直じゃない反応をしてみるといいかもしれないよ」

「……………」

白雪は戯言に付き合う気はないようです。しかしさっきから三点リーダーだけで発言がなく、書き手としてもいささか物足りなさを感じるものではありませんが、しかしここでべらべらとおしゃべりキャラを発揮したりすると、林原某演ずるアルビノ少女がドラマCでビンタビンタと繰り返して総司令官が「私の彼女ではない」と嘆いたのと同様、シュールにかなりえないので、ここでは遠慮させていただくとしましょう。

まあ仮に白雪が人並みに言葉で物事を伝えようとしたならば、この場合「うるせえ知ったことか」といったところでしょうか。言葉に出ずとも表情がありありと語っていたそうで。

さて、所は変わり時も変わり、その日の晩のお城でのことでした。あれから数時間、黒霧が平然とお城の中で生活しているのに誰も反応しないことを白雪はいぶかしんでいました。白雪が黒霧をブラッドパーティーにあげたことは城中全員が知っているはずですし、まさかお城のみんなも、普段異常な王族に振り回されているとはいえず、異常な王族に振り回されているからこそ、異常の程度というものもよくわかつているはずで、「黒霧王妃だからなあ」なんて理由で死者の復活を容易に納得するほどには、まだ疲れてはいないはずです。

そこで白雪はさり気なく城の皆や王様に黒霧のことを尋ねて回ったのですが、なんと、黒霧はもともと死んでなどいない、というふうに、王様までもが認識しているようでした。それどころか、白雪が黒霧に呼び出されたという事実もなくなっているのです。これに関しては投げやりな態度に定評のある事務的鏡にも尋ねたので間違いはないでしょう。どうも、全てがあの日以前の、黒霧がまだ白雪をいじめたとかそういうことも特になく、義母とすら思えないような実に淡々とした関係が続き、その熱くもなく冷たくもない、ひたすらに乾燥した関係がむしろ清々しいくらいの、そんな日常に戻っているようです。ですが黒霧の反応からいっても、白雪の夢物語というわけでもなさそうです。

本当になにもかもが元通りになっているのであれば、白雪としては特に何の問題もなく、また、激しい喜びはありませんが、しかし深い絶望もない、植物のように穏やかな生活へと戻ってしまってもいいのですが、しかし白雪は懸念事項を放置しておけるほど楽観的な人種ではありませんでした。以前のように会話することもなく、お互いをまるで風景の一部とでも見ているようなそんな関係であったならば白雪も元通りの生活に戻れたでしょう。しかし、いまの黒霧はもはや放置しておけないレベルにまで不審さを高めていました。情報収集を終えて、白雪は異常を改めて確認し、そして城のみならず、『白雪が話しかけてくる』という前代未聞の異常事態に、一部は過呼吸を起こすほどの混乱に陥っていることすら知らずに、明日以降のしばしの警戒に備えて、体を休めました。

そうして、白雪が仮死に近い睡眠についた頃のことでした。

「鏡よ鏡、この世で最も美しいのは？」

そんな、似合わない質問を、改めて黒霧が紡いだのは。

Grumpy (後書き)

小説系ブログ「スナーク狩りにも雨は降る。」もございます。
興味のある方は是非そちらもご覧ください。

URLは<http://d.hatena.ne.jp/rainyshrine/>です。

Sneezy

やられた。

鼓動を意識的に調整して覚醒したとき、白雪はまずそう思いました。こういった事態にならないよう、警戒するために体を休めたというのに、これではまるで意味がなくなってしまうました。こういった展開はまるで予想外だった白雪は、思わず一度、深く目をつぶったほでした。

中途半端にお約束を大事にする黒霧のことですから、まったくこれっぽっちも、微塵ほどの怨恨も感謝も憎悪も愛情も抱いていない白雪に対してでも、やはり前回と同様、「継母が美しい義娘をどうにかする」という展開はきっちり守ってくるだろうと予想していましたが、ちよつとそれだけでは認識が甘かったようです。前回、呼び出されたと思ったら出会い頭に心臓を素手で抉り出された事件から、黒霧との直接の接触にばかり警戒していたのが仇となったようです。

「……………」
考えてみれば同じ城内にいます。向こうは別に呼び出したり、出向いたりしなくても、フィールド魔法で四六時中白雪をどうにかしてしまう機会はあったのです。実力不明、経験は明らかに上の相手に対して、読みがぬるい上に甘すぎました。

「……………」
まあ、さんざん怪物との評価を受けている白雪ですがそれはあくまで一般ピーポーから見た話であって、赤雨前王妃をはじめとする人外魔境の鬼神たちから見れば、まだまだ未熟な赤ん坊、くちばしの青いぴよぴよかわいひよこちゃんではなかったというわけでしょう。才能だけで対峙するにはいささか経験と言う壁が分厚かったようです。

「……………」
さて、そろそろ白雪の苛立ちがピークに達しかけてきましたので、
いい加減、現状を説明しましょう。

目を覚ました白雪姫。おはよう小鳥さんたち、なんてそんなメル
ヘンな発言は生まれてからいままで、そしてこれからも決してない
でしょうが、それでも習慣として朝日の昇るのを眺めようと白雪が
意識を急激に覚醒させながら窓辺に目をやったとき、そこに窓はあ
りませんでした。

意味がわからないと思いますが、読んで字のごとく、そこには窓
がありませんでした。窓がないと言つか壁がありませんでした。壁
もなければ天井も、床もありません。というか城がありません。ベ
ッドはありません。あと森も。

「……………」

そうです。どうやら白雪の眠っている間に、ベッドごと例のお城
のそばの森に強制的に転移魔法で飛ばされていたのです。眠って
いるとはいえ白雪が気づかなかったほどです、高度な隠蔽に加え、
転移自体も殆ど一瞬だったのでしょう。高い技術もさることながら、
あえてそんな、地雷原をダイナマイト腹に巻いてスキップして渡る
ような危険行為をあえてしようという発想からして、犯人はどう考
えても黒霧ただ一人でしょう。

しかも念入りなことに、白雪でさえ帰り道を知らない、もはや自
国よりも、目下冷戦中である隣国ナイカルシ帝国に近い、最深部に
飛ばしてやりました。

どうやら、今回は、「継母が美しい義娘を出会い頭に心臓抉り出
して暗殺する」という確実性の高い手段よりも、「継母が美しい義
娘を国外に放り出す」という、結果的にはお約束的な展開になる方
向で攻めてきたようです。帰ってきてしまう可能性含め、その他の
不確定要素が発生しかねない方法ですが、スーパーアーマーとオー

トカウンター標準装備の上、強力オートリジェネのスキル持ちである白雪を真正面から削り殺すよりはよほど燃費のいい方法でした。噂では赤雨前王妃は魔力の続く限り発動するオートリレイズのスキル持ちで、さしもの黒霧も殺しきれず、開かずの間が誕生したとのことですが、あくまで噂です。

話がそれました。

とにかく、直接対決というわかりやすい解決法を寝ている間に阻止されてしまった白雪は、見た目無表情ながら、非常に苛立っていました。もともと白雪はわかりやすいものを好み、複雑なものを嫌うのです。はつきりいつて単純な性格でしたし、思考回路も単純極まりなかったので、「考える」ということが自体が憎らしいほど嫌いなのです。

例えるなら、電池＋電線＋豆電球のような。

まあ極端な例ですが。

ともあれ、このままぼうつとしていては苛立ちは増すばかりです。白雪はようやくベッドから立ち上がり、ナイトガウンのまま、くりと辺りを見回しました。他に着替えもないので仕方がないのですが、鬱蒼と茂る森林の只中で、豪華なベッドとその傍らの高価なナイトガウンを纏った外見だけは美しい少女というのは、なんだかこう、絵になると言うよりも異質としかいえない光景でした。

改めて確認してみても、やはりここは、白雪も来たことのない森の深部のようなでした。転移魔法の距離的限界から推測してみても転移可能なのはお城のそばの森だけですし、なにより、白雪の強力な体内磁石が通用しないのもこの森くらいです。魔術的に確認しても見ましたが、恐ろしいことに黒霧は、転移先座標固定術式もなしに白雪を転移させたようでした。こんな森の深部にマーカーをあらかじめ設置しておくことは難しいでしょうが、しかしマーカーなしでは転移魔法が不安定になり、変なところに転移してしまったり、悪

ければ体の半分だけ転移してしまったりとかするのです。あまりに鮮やかな手並みから言って、少しの躊躇もなく実行したと考えられます。まったく恐ろしい話です。何が恐ろしいって、別に白雪の体がきれいに半分になってしまってもかまわないやと言う気持ちがいびし伝わってくるのがです。

さりげなく命の危険を回避していた白雪ですが、安心はできません。未知に満ち溢れた、既知の外にあるこの森のことです。どんな魔物や危険があるか知れたものではありません。

なんとかして城に戻らなければ………ならない理由が、特に見当たらない白雪でしたが、とりあえずそれを目的にして、この現状を突破しなければならぬのです。

ですがまあ、目下のところ、

「……………つくしゅん」

姫様のお召し物が必要なようで。

Sneezy (後書き)

小説系ブログ「スナーク狩りにも雨は降る。」もございます。
興味のある方は是非そちらもご覧ください。

URLは<http://d.hatena.ne.jp/rainyshrine/>です。

Sleepy

例えば。

例えばの話ですが、もしもあなたが森で迷っていて、やっとこさ民家を見つけた、としましょう。

あなたならどうしますか？

ドアを叩いて助けを求める。そうでしょうそうですね。

でも返事がない。留守のようです。困りました。

もしあなたに余裕があるなら、少し待つかもしれませんが。

ですがお腹がすいて疲れています。もしかしたら空き家なのではないかと言う疑念もわいてきます。

ですからきつと、ドアを開けて中に入ってしまおうでしょう。そして中で休ませてもらうか、もしあまりにもお腹がすきすぎたいたら、申し訳ないながらも、食べ物を持参してしまいかもしれませんが、いえいえ、いいんです。誰だってそうします。私だってそうします。怒られるかもしれませんが、仕方ないことです。事情を説明して、平に謝りましょう。多分、良心的な人間であれば許してくれるでしょう。

ええ、まあ、そういうきちんとしたプロセスがあれば、よほど意地の悪い人でもなければ、一応は許してくれるはずなんです。

きちんとしたプロセス、すなわち順序があれば、の話ですが。

もう、ここまでしつこく露骨に書きなぐれば、懸命なる読者の皆様にはお察しいただけたでしょう。その真逆の斜め上をトップギアで駆け抜けるお姫様の存在を。

お天道様が頭上に差し掛かる時間帯のことでした。依然として着

替えの見つかるはずもない白雪が、やっぱりナイトガウンのまま、まるで城内の足が埋まるくらいふかふかの毛足の長い絨毯を歩いていくように、獣道すらない樹海をするすると滑らかに（しかし当てずっぽうに）進んでいくと、急に森が開けて、一軒の家にたどり着きました。それは不思議にねじくれた、木と一体化したような家で、家から木が生えているような、いえそれよりも、木から家が生えているような、究極の地域密着型住居でした。白雪の住（棲？）んでいた城と比べればとてもとても小さくみすばらしいかも知れませんでした。しかし城下の一般的住居と比べるとかなり立派なつくりです。神秘的というか、とにかく不思議なオーラが、玄関そばの妖怪ポストっぽいのにべたべた張られた「セールス一切お断り」等の張り紙で完膚なきまでに相殺されていました。かなりの庶民くささです。

数秒黙って家を眺めていた白雪ですが、すぐにつかつかと玄関に向かい、広い家にちゃんと聞こえるように、大きめにノックしました。

「……………」

返事がありませんでしたので、もう一度ノックしました。

ここまでは、ええ、きちんとプロセスを踏まえていました。問題はその後です。

白雪はノブに手をかけ、がちゃがちゃと鍵がかかっているのを確認すると、ほぼノーモーションでヤクザキックをかましてドアを蹴破り、土足で（と言うかもと裸足ですが）あがりこみ、視線をめぐらせて住人の姿がないことを確認しました。それから廊下を音もなく進み、ひとつひとつドアを開けて中を確認していきます。その動きは「遭難して困った人」ではなく、「テロリストのアジトを制圧しに来た特殊部隊」のそれでした。白雪にとっては「ちよつと警戒している」と言う程度なのですが、どう見ても「武装テロの首領が潜んでいる」というタレコミを受けた「レベルにしか見えません。これがまだ「ちよつとプロっぽい泥棒」の動きであればよかったか

もしもせん。なんにせよ、お姫様に対する評価ではないでしょうが。

どうやら住人は小柄なようで、基本的に家具は全て小さいものばかりでした。女性ばかりなのかとも思いましたが、物干し竿に干されていた衣類を確認する限りでは、男性のようです。寝台の数から考えて人数は七人。目立つ武装はなく、薬物等も発見されませんでした。特殊な宗教の狂信者と言う様子もなく、ごく一般的な労働者の住居であるようです。隠し通路もなく、罾の類もありません。………というか、何を調べやがっているのでしょうかこのお姫様は。

調べていくうちに白雪は台所にたどり着きました。小柄とはいえ七人分、鍋の類は大きめの寸胴鍋が愛用されているようです。ふたを開けて覗き込んでみると、カレーらしきものが多めに作られていました。量的には二十人以上。どうやら寝かせればうまくなるし、楽しと、あらかじめ作り置きしているようです。なんたる庶民くささ。よく見ると、市販のジャムのビンとか、何かの包装紙とか、レジ袋を三角に折ったのとかが沢山ありました。使う予定もないくせに、何かに使うかもしれないからと取っておいてある空気が濃厚です。なんたる庶民くささ（二回目）。

白雪は慎重に少量を舌に乗せ、毒の有無を確認しました。どこの世界に、予期せぬ侵入者に対して、わざわざ二十人以上のカレーに毒物を仕込んで罾としておいておくものがあるのでしょうか。仕込むものがいたとして、その二十人以上の毒カレーをどう処理するのでしょうか。地元の商店街のお祭りにでも出して新聞にのるのが夢ですかこんなにやろう。

毒物が入っていないことを確認した白雪は、何の躊躇もなく食事の準備に取り掛かりました。これがまだ、飢えて死にそうなぎりぎり感溢れる姿ならば許されたかもしれませんが、白雪はぜんぜんそうじゃありません。むしろ余裕綽々です。まるで家の主のように振舞いやがります。

さて、そのころ、自分たちで舗装したのでしよう、獣道と言うにはきちんと舗装された、細い道を歩いていく集団がありました。みな同じように小柄でしたが、貧相ではなく、むしろがっしりとか、まるっこい体型をしていました。肩にはつるはしやらシャベルやらを担いでいます。それぞれに色分けした帽子をかぶった七人。そう、彼らこそ白雪が不法侵入した家の主である、あの、何故かやたらとミュージカルを入れたがるアニメ映画の大御所で有名な七人の小人たちでした。

ですが、ミュージカルどころか、かの有名なハイホウ、ハイホウは聞こえてきません。あるのは沈鬱な空気と重たい足並み、それから疲労と憂鬱にまみれた労働者たちのため息だけでした。

彼らのぼそぼそとした会話を拾ってみましょう。

「なあ医者。^{ドク}俺あ病気かもしれないよ。最近、朝起きるのがひどくつらいんだ」

「そりゃあみんな一緒だ。皆そろって鬱気味だ。^{ドーピー}おとぼけ。脳天気ですらそうだ」

「ハッピーが？　嘘こけ。いつもどおりニコニコしてるじゃあないか」

「よく見てみるよ、ほら、」

「……………あー……………酸素おいしー……………」

「……………脳天気を通り越して電波だなこりゃ」

「まったく仕方ねえ話だ。クソツタレのコンコンチキめ。宝石ころか銅も鈴もでやしねえ」

「そうだな怒りんぼ。^{グランビエ}この年で就職活動もできんしな」

どうやら彼らが掘っている鉱山が枯れてきたようです。昔から鉱山関係で人間と争うことの多かったドワーフですが、もはや人間すら手を出さないくらい枯れ果ててしまったようです。最後尾の内気^{バーシエフル}に至っては、隠れて就職案内誌をじっくりと読みふけています。

なんたるアンチ・ファンタジーな一行でしょう。大気組成の八割がため息でできていそうな重苦しい空気でした。こんな状態では、たとえ元氣を出させるためであっても、ミュージカルなぞ始めた瞬間、KYすなわち空気読めないのそしりを受けざるを得ないでしょう。

尤も、たとえみんなが元氣であつたとしても、ミュージカルをしようにも音楽やクザや某エンターテインメント会社に告訴されてしまう可能性が高いので、それはそれで悲しい現実でしたが。

医師免許は持っていないもののみんなの体の面倒を見てきたドクでさえも、肝臓を患い始めている今日この頃、保険にも入っていない、というか最初から国からの福祉の枠外に存在するファンタジックアウトローたちはもう、明日への希望を見出すことができませんでした。税金払わなくていいじゃん、などというのは慰めにもなりません。税金は確かに払わなくていいですが、その代わり多くのサービスを受けられませんし、年金も入りませんし、生活保護も申し出ることができません。住民票もありませんから、そもそも住んでいないことにされます。政府どころか地方自治体からもノータッチを決め込まれた存在なのです。

続編を作り出してまで出番をひねり出したにもかかわらず、この境遇は何でしょうか。

泣いてません。別に泣いてなんかいません。あれは汗が目にしみるだけです。

金持ちはみんな死ねばいいのにと何か怖いことを呟きながら、ようやく捻じ曲がつた築ン十年、金がないので改築もできない、匠も見捨て果てた自宅へと到着した小人たちは、誰一人「ただいま」の言葉もなく、黙々と玄関をぐって行きます。何故か鍵が壊れていましたが、それすらも多くの不幸のひとつとしかとらえられないらしい澱んだ目です。毎週日曜日の愉快な家族のエンディングとちょうど対極のテンションです。

俺たち、何のために毎日生きてるんだろっ、そんな根源的な悩みを背負いながらも、ともかく腹ぐらいは膨らませようと食堂にたど

り着きました。そして硬直しました。

皆様はおわかりでしょう、そう、白雪はちょうどこのとき、堂々と家宅侵入した挙句、堂々と人様の飯をいただいている最中だったのです。尤も、彼らが硬直したのは、見知らぬ人間が堂々と飯を食らっていることに対してではありませんでした。いえ、確かにそれには驚いていたのですが。

「……………あー……………」

ぼかん、と七人はそろって口を半開きに、呆然としていました。

もし見知らぬ少女が堂々と飯を食っているだけでしたら、彼らはすぐに我を取り戻して不法侵入者に対して正当なる怒りとして（および日ごろの鬱憤を晴らすために）、激しく問い詰めたでしょうが、現場はそれだけではなかったのです。

なんとということでしょう。

丈夫さだけが売りの、ささくれ立ったり節が飛び出ていたりした無骨な手作りテーブルには、糊も利いた真っ白なテーブルクロスで覆われ、同じようにごつごつとした椅子もきちんと足の高さが合わせられ、布を張り、無垢なデザインであるように見せていました。

梁から下げられていた歪んだカンテラは取り払われ、代わりに押入れに押し込んであったさび付いた燭台が、きれいに磨かれて明かりが部屋をやわらかく満たすようにバランスよく各所で蝋燭を灯していました。極めつけは侵入者の前に並べられた食事で、きれいに磨かれたグラスに注がれた水は、ただの水でありながらどこか高貴な輝きを湛えており、またただのカレーライスでしかないのに、顔が映るほどぴかぴかに磨かれた銀食器と、そしてナイトガウン姿ながらもあまりに上品な白雪のマナーによって、最高級のメインディッシュにすら映ります。

あ…ありのまま今起こった話を話すぜ！ 『慣れ親しんだ家に帰ってきたと思ったらいつの間にか三ツ星レストランのテーブルにくわしていた』。な…何を言っているかわからねーと思うがおれも何をされたのかわからなかった。頭がどうにかなりそうだった…。

疲れて幻覚を見たとかそういう夢を見たんだとかそんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ……

と後にドービーは語ったそうです。

呆然としている家人をそっちのけで食事を終えた白雪は、ナプキンで口元を拭いてから、ようやく顔を上げました。ドワーフたちは思わずびくりと一歩後ずさりしました。まるで宇宙人と遭遇したような態度です。なんだかどっちが家の主だかわかりません。インテリアか何かを物色するような目つきでドワーフたちを眺めた白雪は、それからゆっくりと立ち上がり（やつぱりドワーフはこれにもびくりと警戒しました）、口を開きました。

「私は眠い」

「……………は？」

「だから私は寝る」

謝罪でも弁解でもなく、下手な英語の訳のような宣言だけを残して、音もなくすう、と白雪は寝室へと姿を消しました。ぱたん、と戸の閉じる音でドワーフたちはやっと体が硬直するほどの緊張から開放されて、安堵のため息をつきながら、惰性のようにやたらバージョンアップした各々の席に腰を落ち着け、深々とため息をつきました。いったい今見たものはなんだったのか、とドワーフたちは激しく動揺し、混乱していました。これもやつぱり惰性で、普段使っているものをきれいに洗っただけらしいのにやたらと高価に見えるティーポットで人数分の紅茶を淹れ、一服したころ、ようやくドワーフたちは落ち着いてきました。

そして、ようやく

「……………ええ？」

ようやく落ち着いて混乱することができました。

Sleepy (後書き)

小説系ブログ「スナーク狩りにも雨は降る。」もございます。
興味のある方は是非そちらもご覧ください。

URLは<http://d.hatena.ne.jp/rainyshrine/>です。

Happy

結局、ドワーフたちが我が物顔の侵入者に対しての混乱をどうにか収め、対策を話し終えるまでに一晩かかりました。何しろ前代未聞の事態です。ドワーフたちもどうしたらいいのかわからなかったのです。七人もいるんだからさっさと放り出せばよかったのとお考えかもしれませんが、なにしろ相手はあの白雪です。どんなに穏やかに、我が家で寛いでいるような態度であっても、本能的に敵わないことをわからせる程度の能力は十分に発揮されていたのです。それにより、ファーストインパクトが強すぎて、何をするにしても機を逸してしまった感がありましたし。

ともあれ翌朝になって、寝起きにもかかわらず一切乱れたところのない白雪が、相変わらずガウン姿ながらも堂々と食卓に訪れたので、ドワーフたちは一晩話し合った対策を実行することにしました。即ち事情確認と場合によっては早急なる退去勧告、このふたつです。問答無用の追い出しではないのは、格好からして何か事情があるのではないかと一部の良心が考えたためです。そこらへんの甘さが、鉱山経営の失敗や、根拠もないのに連帯保証人になってしまったこと、その借金から逃げた結果二度と森の外には出られなくなったことなどをはじめとする数々の過ちにつながったことをいまだに学習できていないようです。まあその甘さがなくなってしまったとき、ドワーフたちのかろうじて残ったファンタジーは消えて失せるのかもしれません。

さて、誰も勧めていないのに我が物顔で上座についた白雪（家具は予備などなかったので、たぶん白雪が作った椅子でしょう、他より見栄えがいいです）に対し、すでに席についていたドワーフたちの代表として、グランビーが白雪をじろりと睨んで、口を開きました。なにもおこりんぼなんて名前の奴を代表にしなくても、とは思

いますが、あいにくと他のメンバーは、おとぼけは機微に鈍いので話し合いに向かず、くしゃみは花粉症で長時間の会話が困難、内気は名前のとおり社交的でなく最近では内気からどもりへと姓名変更が実行される気配があるほどで見知らぬ人物と会話させるのは無謀、寝ぼすけは万年睡眠不足で昨夜も一晩持たずに現在熟睡中で会話が不可能、元気が取り柄のはずの能天気に至っては日々の困難に負けないためか負けたためか澁んだ笑みを浮かべるばかりで電波なことしか言わず日常会話すらアウト。というわけで、医者^{ドク}がサポートをし、ままならない日々^{グランビー}に憤慨はしてもいまだ気力十分な怒りんぼがメインで尋問するということになったのでした。

さて、高血圧であり怒鳴るなどドクに止められているグランビーは、白雪を睨みながら、抑え気味に問いかけます。

「さて、あんたが何者かは知らんが、あんたのしたことは不法侵入に無銭飲食、この場合窃盗か？、それから昨夜確認したら器物損壊までしていやがったな。こいつは立派な犯罪だぞ小娘。ことと次第によっちゃたたき出すだけじゃ、」

「私は腹が減った」

問い詰めるうちにだんだん腹が立ってきたのかついに怒鳴りかけたグランビーを、まるで空気か何か、具体的には窒素か何かのようにあっさりと無視して、白雪はそう主張しました。別にうるさい文句を止めようとか、そういう意図はまったくなく、純粹に言葉通りのようです。怒るでも嘲るでもなく、手酷く無視したというのでもなく、最初からアウトオブ眼中なのでした。

「私は腹が減った。食事の支度はまだか」

ふざけているのか、と怒鳴ろうとしたグランビーの鼻先をはたかのように、白雪は繰り返しました。そしてさらに具体的な催促までつけてきています。呆然としたのかそれとも怒りのあまりなのか、口をパクパクさせるばかりで何も言えないグランビーと、呆気にとられたその他全員を順繰りに眺めてから、どうやら動く様子はないと判断したらしい白雪はゆらりと立ち上がりました。そして警戒し

て思わず少し引いたドワーフたちに向かってこういったのです。

「わかった。では私が支度する」

そしてすると音もなく台所へと消えていってしまいます。奇怪な生き物が視界から消えたことと思わず安堵のため息をついてしまったドワーフ一同ですが、グランビーは何とかすぐに我を取り戻し、そして猛烈に怒り出しました。

「な、な、なんだあいつは！？ あのアマ何様のつもりだ！？」

お姫様のつもりですがなにか、と答える声はありませんでしたが、しかしグランビーに同調するドワーフたちの声がありました。熟睡中のスリービーと日常会話がアウトなハッピーを除いた5人は、口々に文句をいいました。

「勝手に忍び込んで勝手にあちこちいじって勝手に飯まで食って、今度は催促までしてきやがるとは！」

「まったくだなグランビー。あんな女は見たことがない。親の顔が見たいという奴だな」

「あー、もうなんだかぜんぜんわからねえなあ。俺の頭が鈍いだけなのかドク？」

「安心しろドービー、わしらもわからん」

「そ、そ、そそそうだね、うん、う、うん、わ、わかんない」

「喋るなどもり！ オレはお前のそいつが頭にくるんだ！」

「まあまあ、仕方ないじゃへっぶしゅ！ ぐず、ぐず……落ち着けよへっぶしゅ！」

「そうだぞグランビー、怒るのはわかるがな、当たるのはよせ」

とそんなふう白雪に対する文句からやがて内輪もめに発展しかけた頃、盆に皿を載せた白雪が戻ってきました。盆の上には、やはり、カレーライスです。しかしそれだけでなくサラダまでついています。そんなもの作った覚えはありませんから、白雪お手製ということでしょう。カレーライスにも手を加えたらしく、怒りに任せて怒鳴りつけようとしたグランビーも、つついその芳醇な香りに気をとられてしまいました。眠っていたスリービーまでうつらうつら

と起き出す次第。

人数分用意されたそれらが全員の前に運ばれ、白雪もようやく席につきました。そしてゆっくりとドワーフたちを見回して言いました。

「それでは朝食にする」

てめえが仕切るんじゃねえ、とグランビーは口では言いましたが、素直に料理に手をつけました。あまりにもいい香りで、我慢できなかったのです。そして一口口に含んで、思わずうまいと叫んだ頃には、他のドワーフたちも釣られて料理にむさぼりつきました。白雪もやはり、文句のつけようのないマナーで食事を始めます。

ドワーフたちは日頃食べている食事とは雲泥の差のある素晴らしい料理に、思わず生きるということに感動すら覚え始めていました。それほどまでにおいしかったのです。味覚を通じて脳みそを揺さぶるようなシヨック、そしてそれと同時に穏やかに満たしていく穏やかな波のような感動、一口食べればまた一口とこらえきれず、飲み込むことに脳裏が真っ白にすらなります。栄養摂取というだけの食事ではなく、味わうという意味を持った食卓。今まで食べたこともないような味、今まで感じたことのないような感覚、舌がしびれるような気すらします、体が震えるような心地さえします。全身が痙攣して、顔が引きつり、手足がうまく動かなくなりさえします。

そう、料理にはいろいろとアレな毒キノコが入っていたのです。

「ぐ、ぐふっ……………し、しまった、毒キノコの幻覚でうまいと感じていたのか…………！」

ドクが気づきましたかときすでに遅し、半分以上平らげてしまっています。他のドワーフたちも同じようなもので、抜きん出て頑丈なグランビーがなんとか体を支えているだけで、他はみんなテーブルに突っ伏して痙攣しています。スリービーなどは途中で睡眠不足のあわせ技もあったのか顔をカレーの皿に沈めており、ハッピーに至っては巻き舌宇宙で有名な紫ミミズの剥製云々と謎の発言を繰り返しています。ただひとり白雪だけが平然と平らげ、食後の紅茶を

けろりとした顔で飲んでいます。ドクは白雪が自分の皿以外に細工したと考えましたが、実際には白雪は毒キノコが利いていないだけでした。そう、白雪は美味しそうだから入れただけであって、計画して毒を盛ったわけではなかったのです。しかし結果として毒の効果が出たいま、白雪がそれを見逃すわけありません。

紅茶を飲み干すと、まだなんとか意識を保っているグランビーに液体窒素のような視線を向けて、言いました。

「食事で話を中断して悪かったな。ことと次第によってはたたき出すだけではすまないそうだが」

「て、てめえ……………おのれえ……………！」

「しかし私には行く当てがない。そこでお前たちに恩を売ってしばらくここに居つかせてもらおうと思う」

しれっとそんなことを言って、白雪はことりと小さなビンを取り出しました。

「解毒薬だ」

どうやっても絶対手の届かない距離でその解毒剤を振って見せる白雪姫は、ぜんぜんあくどい顔などしていません。それが逆に恐ろしいものを感じさせました。この女は解毒剤が欲しければ居座らせると脅迫しており、しかも了承しなくてもドワーフたちはこのまま毒で死亡、何の問題もなくつつがなく白雪は新居を入手、という流れが用意されているのです。自分で毒をもっておきながら恩を売るも減ったくれないようですが、殺してもいいところを生かしておいてやる、という意味では確かに恩かもしれません。

断ってこのままデッドエンドを迎えるか、受け入れてバッドエンドを迎えるか。二択であるはずなのにどちらも最悪です。しかも時間制限付です。

グランビーは代表として選択しなければなりません。全員の今後を大きく左右する決定です。ならばまだマシなほう、マシなほうを、とグランビーは齒軋りします。思いつきり屈辱的ですが、死ぬよりはまだマシであるほうを選ばなければなりません。自分ひとりでし

たかどうか知れませんが、全員の命の責任を取る勇気はグランビーにはありませんでした。

ですから、グランビーは選びました。

「げ……解毒剤をくれ……！」

そう、それが今後の不幸せな生活を予感させるものと知りながら。

Happy (後書き)

小説系ブログ「スナーク狩りにも雨は降る。」もございます。
興味のある方は是非そちらもご覧ください。

URLは<http://d.hatena.ne.jp/rainyshrine/>です。

B a s h f u l

白雪姫がドワーフたちの家に（強制的かつ脅迫的に）居候を始め
てから大した時間が流れないうちに、ドワーフたちは白雪の恐ろし
さをじわじわと知る羽目になっていました　　ということもなく、
むしろドワーフたちは白雪のおとなしさに警戒すら抱くほど、白雪
は何事もなく穏やかに過ごしていました。とはいえこの穏やかとい
う単語は常人を相手に使う場合とは違い、正確にはそこに「植物の
ように」と付け足すべき形容詞で、日がな一日、必要最低限の会話
以外は全く黙ったきりで掃除や洗たく、食事の用意（これらは一応
白雪が自主的に始めたものでしたが、たぶん自分の生活環境を整え
るためだけでしょう）などもないときは、一人隅のほうで椅子に腰
かけ、瞬き一つせず身じろぎもせず、じっと座っているのです。で
もドワーフたちがたまに振り返ると、ガラス玉みたいな目が作業を
監視するようにじっと見つめてきているので、単に植物や人形とい
ったものではない妙な迫力と生々しさがあり、怪談めいた恐怖がじ
わじわとありました。

ですがそういう悪いことばかりでもなく、男ばかり七人もむさく
るしく過ごしていた薄暗い家は、掃除の直後は空気のおいさえ喪
失するほどに徹底的に消毒されはしますが、きれいに磨かれ、風の
通る清潔な、小洒落た雰囲気さえもつようになりましたし、手間が
かからないよう一度に大量に作って黙々と腹に収めるだけだった、
栄養価の偏ったレパートリーの少ない食生活も、いつ毒物や中毒性
のある薬物を盛られるかの恐れはあれど、今では味も栄養もよく考
えられ、見栄えもよい料理の数々が毎日食べられるようになりまし
た。食生活の充実のおかげで、若干薬物の形跡を疑いながらも生活
習慣病の疑いがあった体は健康に向かい、心もそれにつられるよう

で、かつての軽度の鬱症状は、まあややマインドコントロールを連想させましたが、まるで嘘のようです。相変わらず鉱山は宝石が出土ませんが、いままで役に立たないと思っていた鉱石の利用法を白雪が提供したことで、調合錬金その他の過程の危険度合いがぐっと増しはしたものの、ドワーフたちの仕事は充実感あふれるものとなっていました。

まさか、こんな穏やかな日々が打ち破られるとは……………ドワーフ一同うつすら感じていました。

というか実際、ドワーフたちの生活は打ち破られていますし、今度は悪い方向で打ち破られるだろうというのは誰だって考えることでしょう。そしてその予想は、どうやら的中してしまったようなのです。というのも、こういう次第です。

あるうらかな午後のことです。ドワーフたちはお昼も済ませて、午後の労働に出かけています。優しい木漏れ日が辺りを包み、甘い風が木々をすり抜け、小鳥たちがのどかな歌声で歌っています。この森は大ナイカホア及び東西南北中央グレートイナモデント島及びンネヤデンナ諸島共同独立連合社会民主主義人民共和国連邦合衆首長共産帝国（第8970113回国名選考国民審査大会決定の第138次国名）においては、磁場が完全に乱れきり、ところどころ空間が振れているせいで方位磁石も測量も通用せず、場所によって温度や湿度がまるで違い、更にその環境に適応するため独自に進化し、生態系として魔法を扱う動植物が蔓延り、悪意の有無に関わらず過激な妖精精霊その他諸々の悪戯により被害は甚大でしたが、隣国ナイカルシ帝国においては、比較的穏やかな地形、生態系らしく、立ち入ること、また出ていくことは困難ですが、入って三步であの世行きみたいないなことはないようで、表面上は少々不可思議な深い森、

みたいな感じのようでした。

だからといって安心できるという話でもありませんでした。黒霧王妃も考えなしにとりあえず放り出したというわけではないようで、遅まきながら白雪も事実に気づいてころなし眉を寄せました。森の最奥　　というのは大ナイカホア（以下略）からだけでなく、隣国ナイカルシ帝国から見ても同じ距離ということで、さらに言うならば森のこちら側はよほど環境が良いのです。ということは場合によっては、隣国ナイカルシ帝国の人間と接触することもあり得るということなのです。

ナイカルシ帝国は閉鎖された環境にあるナイカホアとは異なり外に大きく開けた大国で、かつては森を遠まわりする形ながらも、ナイカホアと外交のあった国でした。ところが何十年前、当時の女王様であらせられる朱囊陛下シュミツレが、しつこく情熱的にうざったく懲りずに何度でもアプローチしてきた当時のナイカルシ帝国国王藤空様フジソラにととうとう堪忍袋の緒を自主的に切断、軍隊の合同演習にかこつけて、この森にてご自身の指揮なさった部隊で帝国軍を殲滅、と同時に藤空国王を半殺しにして、「私のご先祖は大悪魔、私は魔王様、よろびく」とのちに王妃となるご自身の娘と似たような発言を残し早々に帰城。「素直じゃないところが可愛いんだ」と脳のとろけた発言をこぼした藤空国王を脇に、能天気かつ暢気な王族では話にならんと大臣たちがナイカホアとの国交断絶、敵対を宣言し、かくして両国の接触＝即戦争という公式が出来上がってしまったのでした。

そんな状況下ですから、国境のあいまいなこんなところに、敵国の人間である白雪がいることが知られば、帝国は軍隊を繰り出してきてしまうでしょう。単体で大隊クラスともやりあえる白雪でしたが、向こうさんは少なくともここらを軍事演習の場として何度も使っている軍隊ですから、地形効果は向こうに有利です。自由に動き回ることの難しい森の中では、さしもの白雪もうまく立ち回ることはできませんから、正直厳しいところです。補給線もなしに迎え撃つことも、慣れない土地でゲリラ戦を挑むのも、理想的な戦術と

は言えません。退却という手段は森を抜けることのできない白雪には不可能ですし、案内を頼もうにもドワーフたちが森から出る道は必ず人里と通じているのです。もはやこの状況では、すでに戦略的に敗北していると言っているでしょう。何より、白雪の将来の夢である、激しい喜びはないが代わりに深い絶望もない、植物のように穏やかな日常を暮らすためには、そういった面倒は背負い込みたくないものです。

結局は身動きもとれず、ドワーフたちに寄生する形で無為に時を過ごすのが、白雪にできる精一杯でした。まあ考えてみれば城にいたころも毎日は無為に過ぎていましたから、行動パターンが変化しただけで、大差ないのかもしれませんが。白雪もこのままでも別に構わないかなー、などと考え始めていた、そう、そんなあるうらかな午後のこと（二回目）です。

白雪が家事も終えてしまったので、普段どおりに部屋の隅で一人椅子に腰かけて石造か何かのように静止していると、不意に家のドアをノックする音が聞こえました。ドワーフたちがノックなどするわけありませんし、風で飛んできた何かがぶつかっただけというには、きちんとしたノックでした。

K n o c k , k n o c k , k n o c k !

白雪が視線を向ける間に、きれいに続けて三度、ノックが響きました。少し待ってみるともう一セット。間違いなく、来客のようです。白雪は警戒してゆっくりと音もなく立ち上がりました。こんな森にいるのは、先ほど言ったような軍事演習に使っている帝国軍か、森の原生生物、幻想の存在であるいわばモノノケ的なドワーフたちくらいのもんです。少なくとも白雪が寄生してから今まで、誰一人として来客などなかったわけですから、これは十分、異常と言えるでしょう。

白雪は気配を消して玄関に向かい、ドアの向こうの気配を探りました。のぞき窓などなくとも、戸板一枚向こうの気配を探る程度わけのない話です。どうやら気配は一人のようで、それほど力強い気

配は感じません。そうしている間にもノックの音は止まず、放っておけばずっとやっていそうです。さすがにそれは鬱陶しいので、白雪は警戒態勢は解かないまま、ゆっくりとドアを開きました。

「おや、ドワーフでもないないようだね。久しいね、白ゆ」

ばたん。閉めました。

なんだかいま、いるはずのない人間がいた気がしました。

まあ落ち着いて考えれば、白雪を片付けてしまった今、彼女がこんなところまで来る必要はないわけで、逆襲を受けた経験があるのですから正面切って殺しになど来るようなことはないでしょう。というわけでやっぱりただの見間違いで

「ひどいな白雪、我が義娘。客人を門前払いするような娘に育てた覚えはないぞ」

……………は、なかったようです。

どうやらドアを開けた一瞬を使って、白雪の背後に回り込んでいたようです。

白雪最大の敵にして、現在最大の問題である人物 黒霧王妃

は。

「……………」

「ふむ。そこは育てられた覚えなどはない、という返事が欲しかったのだがね。私も継母だ、育てた覚えはないよ」

「……………今更何の用だ」

敵意むき出しの白雪に対して、黒霧は実に余裕たつぷりです。常人ならばそれだけで心臓まひを起こしそうな殺気を前にして、上等のセイロンをウェッジウッドの青白にて、アフタヌーンティーとしてスコーンなどの軽食とともに、談笑しながら楽しんでいるような、そんななんでもないような、むしろどこからかうような態度でした。

「いやなに。てつきり森に食われて終わったころだろうと思えば、まだしぶとくやっているようだからね、敬意を表して、見舞いの品を持ってきたのさ」

限りなく胡散臭い言葉とともにぽん、と何気なく放り投げられて
ものを受け取ってみると、それは真つ赤な林檎でした。

「……………」

胡散臭い。その言葉が真つ先に、白雪の脳裏を駆け巡りました。

城の者たちは全く覚えていなかったようですが、白雪は確かに、一度この継母に殺されかけたことを覚えています。黒霧自身もそれをほのめかす態度です。そんな相手が寄越したものなど信用できるはずありません。

「ふざけるな。こんなもの」

「

投げ返そうとしたところで、ふと白雪の脳裏に黒霧の言葉がよぎりました。そう、それは黒霧との思いがけない再会を果たした日のことでした。黒霧は白雪にこういったのです。「相変わらず単純なようだね、白雪姫」と。

「……………」

白雪にとつて、侮られている、というのがはつきりとわかる言葉です。そんな奴を前にして、たかが林檎ごときで……………。

「ああ、安心したまえ。君に毒が利かないのは承知の上だ。毒など入れてはいないよ。……………ああ、勿論、恐ろしいというのなら別に構わないけれど」

駄目押しでした。そんなことを言われて退けるはずありません。白雪はがぶりと林檎にかじりついて、ごくりとその一口を飲み下しました。さわやかな酸味と甘みが舌の上で踊り、喉もとで急激に体積を増し、蠢きながら器官を封鎖しました。

「……………ッ!？」

「利かない毒を入れたりはいしない、と確かに言ったがね。細工をしていないとは言っていないだろう、白雪姫。いや、まったく我が義娘ながら単純で助かるね」

いかな白雪でも、酸素がとりこめなければ動くことはできません。自動でリザレクションがかかったところで、喉にある林檎が外れない限り酸欠状態は改善されず、死に続ける羽目になるわけです。苦

しみながらも黒霧を睨む白雪でしたが、黒霧は素知らぬ顔でげしりと白雪を足蹴にして、早々に家を後にするのでした。

「これで私の仕事はおしまい。まあ後は君のほうで適当に頑張るといい、白雪姫」

最後まで人を食ったようなことを言いながら、どこかへと消えて行っていました。

さて、そんなことがあったとはつゆ知らず、仕事を終えたドワーフたちは家に帰るなり心臓が止まるかと思うくらいびっくりしました。なんとあの白雪姫が玄関でぶっ倒れているではないですか。まあもつともドワーフたちが驚いたのはそのことよりも、どうやら意識を失うまで苦しんで暴れたらしく、台風か何かが局所的に発生したかのように、丈夫な木でできた玄関が素手でずたずたにねじ切られていたことです。

「な………なんじゃこりやああああ!？」

グランビーは驚きの余り太陽に吠えました。ドービーは呆然の余りぽかんと大口を開けたまま、スニージーもくしゃみをしようとした体勢のまま、状況が理解できずに止まってしまったほです。スリービーは現実から目をそらし、寝たふりを決め込み、ハッピーに至っては突然壊れたようにケタケタと笑いだしました。ドクはなんとか冷静を保っているようで、白雪の安否を確認に走り、バーシェフルがなんとかそれにひよこひよこついていきます。

ドワーフたちが何とか落ち着いて、玄関を片付けようという気が起こり始めるころには、ドクの診断は出ていました。呼吸はなし。脈拍も確認できない。体温も低下しつつある。

「つまり、死んでるということだな、これは」

実際には無駄な消費を減らすために仮死状態に陥ったのですが、ドクたちには判断できません。いや、というか普通は死んでなきやダメなところでしょう、これは。いくら極悪非道な白雪でも一応は

普通の人間と考えていたドワーフたちですから、死んでしまったものと判断しても仕方ありません。悲しんでいいのか笑うところなのか、突然過ぎる上に白雪の立場が微妙ですから、ドワーフたちは何とも言えない複雑な思いでした。

「うむ……………一応は我々と共同生活を営んでいたわけだ。弔いぐらいはしてやろうじゃあないか」

ドクはドワーフたちにそう呼びかけ、ドワーフたちもおおむね賛成しました。正確には、バーシエフルが同意し、グランビーはさつさと放り出すべきと主張し、ドービーはよくわからないがドクの意見に従うとし、スニージーは玄関破壊の結果である埃でくしゃみが止まらず発言不可、スリービーは寝たふりのつもりが本格的に熟睡、ハッピーに至っては見えないお友達との会話を開始、よって賛成3、反対1という結果でした。一応半数以上は発言してるので問題ないでしょう。民主的です。

といっても大したことができませんでした。破壊された玄関の瓦礫を使って棺桶を作り、近場で取れた花を散らし、そこに白雪姫の体を横たえたくらいのものです。ドワーフたちは横たわった白雪の姿を見下ろしましたが、まるで眠っているだけでそのうち起きてきそうです。まあ実際まだ死んではないのですが。そんなことを知らないドワーフたちは、なんだかこれを埋めても夜中に地中から蘇って、ゾンビのように自分たちを頭からヴァリヴァリ食ってしまうのではないかとかなり生々しい想像をしてしまいました。何が怖いって、この白雪なら本当にやりそうなところですよ。

これをどうにかするのも嫌だし、どうにかしないのも困る。埋めなきゃならないのだからうけれど埋めるのが怖い。二律背反というものでしょうか。ドワーフたちが途方に暮れている頃、森に訪れる一人の若者がありました。

「やあ、今日は空が青いなあ、小鳥も歌ってるよ。森は危ないから入るなってみんな言うけれど、大丈夫だよ。だってこんなに空が青いんだもの。だってこんなにおひさまが笑ってるんだもの」

そんなメルヘンチックで年齢的にはちょっとねじの跳んだような発言を誰へともなくもらしながら、若者はずんずんと森を歩いていきます。身なりからお金持ちの坊ちゃんといったところでしょう。うか。夢見がちな、とつけるとより良いかもしれません。

「なんだか今日はいいい出会いがありそうだなあ。あんなに雲が輝いてるもの」

うざったいさわやかさという矛盾した雰囲気をとばとばとあふれさせながら、若者は何の確信もないくせにまっすぐ歩いていきます。幸か不幸か、偶然か必然か、卵が先か鶏が先か、ドワーフたちの家に向かって。

こうして、最後のキーパーソンが現れるのは次回に続いてからのことなのですがまあ登場自体は今回済ませたということ。

さて、セオリー通りに進むのか、あくまでセオリーにさば折りを決めるのか。乞うご期待。

Bashful (後書き)

小説系ブログ「スナーク狩りにも雨は降る。」もございます。
興味のある方は是非そちらもご覧ください。

URLは<http://d.hatena.ne.jp/rainyshrine/>です。

ドワーフたちが悲しむべきか喜ぶべきか泣くべきか笑うべきか、というよりは突如発生して突如消え去った嵐に対してどう反応すればいいかというような問題に直面していると、いかにもお頭の軽そうな足音とともに見慣れぬ若者が通りすぎりました。

効果音的に言うとならと言った感じで、視覚的にはバックに薔薇の花等を散りばめるか無駄にきらきらさせるとよいでしょう。つまるところ空気の読めていない、若者向けの言葉で言うとなら登場でした。

スルーできれば何よりなのでしょうが、白雪によって鍛えられたドワーフたちのスルースキルを持ってしてもスルーしきれないKYっぷりです。なんとも無駄な存在感というか違和感というか、そう言うものに満ち溢れていました。

「やっ！ これはどうということなのだろう。こんなにも美しい女性がッ！」

しかも目を付けられました。それにしても無駄にリアクションの大きい人です。

あまつさえ事情が分かっていそうなドワーフたちに、生まれたばかりの子犬でもここまで無垢に、相手が自分の望みを叶えてくれるだろうことを疑いもしないような純粹さはないだろうというくらい、きらきらした目で見つめてきやがります。さらに目をそらすとその方向に移動してくるといっしょさです。

まあ、正直なところドワーフたちもどうしたらいいのかさっぱりわからなかったのだ（白雪とこの若者、二つの意味で）、これなるは白雪というお姫様だか怪物だかよくわからないナマモノで、我々はこのしばらくをこれと過ごしていたのだが、本日仕事から帰って

みると、玄関先で死亡していたようであると、ごくごく簡潔に説明しました。

すると若者は見惚れるほどにうざったくめまいを起こしたかのよう
に膝をつき、嘆き悲しみました。

「ああ、なんとということだろう。こんなに空も青いのに、こんな
におひさまが笑っているというのに、こんなに雲が輝いているとい
うのに、この誰も踏んだことのない清らかなる初雪のような人が死
んでしまっているなんて！　もしそうでなかったならばぼくはき
つと、この丘に一輪ひっそりとけれど誇らしく咲く白百合の花のよ
うな麗しい人を前に、恋の余り心臓を激しく震わせ、城の薔薇園の
全ての薔薇をブーケにして彼女に捧げたよ。もちろんそれらの美し
い薔薇たちでさえも彼女の美しさには到底及ばないことは分かつて
いるけど。ああ、かのクレオパトラやヘレネあるいは楊貴妃をもし
のぐ美しさに、嫉妬深いヘラの怒りを買ったのかな。この美しいお
姫様をよみがえらせるためなら、ぼくは夜空で燃える星となって永
劫世界を照らし続けても構わないよ」

突然の長つたらしくうざったいやたらと説明的な若者のセリフに、
呆氣にとられたドワーフたちは、思わず「あー、昔の文学ってこん
な感じだったよなあ。英文学限定かもしれないけど、しかしなんだ
って言わんでも察せそうなことを論文みたいに長つたらしく語るん
だろうなあ。あと形容詞にくどくどとやたらめつたら比喻表現くっ
つけるのもどうかなあ。表現方法としては認めるけどわかりづら
いんだよなあ」などどうでもいいことを考えて現実から逃避してし
まいました。もともとメルヘンなナマモノが現実から逃げたところ
で大して意味はないでしょうけれど。あ、あるいは現実逃避ではな
く現実逃避したかったのかもしれない。なにしろこの若者、お
頭の中身はドワーフたち以上にメルヘンでしたから。

そんだけの覚悟があるんなら、是非とも進呈するから早々にそれ
を持ってどこへなりと行って頭の中が春一杯な幸せな生活にお帰り
になってそして二度とここに帰ってこないで頂けますかねえ、とグ

ランビーが慇懃無礼に提案しようとしたところ、若者は急にがばりと立ち上がって、同情を誘うような切なそうな表情で言いました。「一緒に生活なさっていたあなたたちにこんなこと言うのもなんですけど、死体でも結構ですから、よかつたらばくにくださいな。そして思い切り悼ませてほしいんです」

その表情がまた非常にうざったかったのもありますが、実に全く望み通りの提案でしたから、ドワーフたちはどうぞどうぞと喜んで棺を押しやり、若者に差し出しました。

若者は、はてさていったいどうやって持って帰ろうかなどと考えながら白雪を見つめていましたが、そうこうするうちにまたも愛しさが激しくこみあげてきたらしく、棺の傍にかがみこむと、ドワーフたちの視線のもと、哀悼の念たつぷりに、白雪の薄い唇にそっと口付けました。殴られました。吹き飛びました。

なにやら白雪の全身を形作る二重螺旋が全霊を持って拒絶したらしく、意識もないのに反射的に繰り出した拳が、惚れ惚れするほどきれいに若者のあごにねじ込まれ、そして弾き飛ばし、空中にいる間六回ほどきりもみ回転をさせ、そしてまた地面で三回ほど転がせて、そこでやっと若者の体は静止しました。

白雪はおもむろにむくりと立ち上がり、まったく珍しいことに嫌悪感たつぷりに顔をゆがませて、げえげえと毒りんごのかけらとついさつき起こった事実を吐き捨てました。またそれだけでは二重螺旋の不满がおさまらなかつたらしく、今の今まで自分の入っていた棺をむんずとつかみ上げて、立ち上がるうとした若者の顔面に、素晴らしく美しいフォームで投げつけました。衝撃の余り砕け散る木片にもまれながらも、背景をきらきらとさせて吹っ飛ぶ若者のなんとうざつたいことか！

さっきまで死んでいたと思われていたはずが、なんでもなかったかのようにけろりと、けろりと言うにはあまりにも不機嫌な表情でしたが、平然と復活しあまつさえ早速暴虐を振るい始めた姿に、ド

ワーフたちはあつけにとられると同時に、うつかり埋めてしまつて夜中に地中から蘇り、自分たちは頭からヴァリヴァリ食べられてしまふのではないかというかなり生々しい想像があながち間違ひでもなかったことを悟り、迂闊に行動を起こさなかったことに安堵をおぼえるのでした。そしてもちろんのこと、今現在若者に向けられている破壊行動が間違つても自分たちに向かないように、そそくさと距離を取つて傍観者を気取る事も忘れませんでした。

さて一方、吹き飛ばされた挙句顔面に棺を叩きつけられた若者はどうなったかというところ、こちらはまさしくけろりという表現がぴつたり合う状態で、すなわち二度の盛大な暴力がまるでなかったもののように、相変わらずバックに花やらきらきらしたものやらをうごたたくまとわせながら、シヤランラと立ち上がつて、少女マンガにありがちな目の中の星をきらきら輝かせて白雪姫を見つめていました。

「ああ、生きてたんだね白雪姫！ そうだよねえ、こんなに空が青いもの、こんなにおひさまが笑っているもの、そんな悲しいことが起きるはずもないものね。きつと神様がぼくたちの出会いを祝福して、生き返らせてくださつたんだね！」

どうやら若者のこうしたうざつたい発言、またうざつたい行動のひとつひとつが白雪姫の二重螺旋をじくじくと刺激するらしく、これまでドワーフたちが見たことも想像したこともないほどに、白雪の顔が不快感でひどく歪みました。ここまで嫌そうな顔というのは、普通の人間でもなかなか見れないかもしれない。そしてまた白雪の若者に向ける視線の冷たいことと言つたら！ 養豚場の豚を見る、可哀そうだけど明日の朝にはお肉屋さんの店先に並ぶ運命なのねって感じの残酷な目でさえ、ここまで冷たくはないでしょう。

殆ど感情が見えない白雪にこれほどまでに生理的に嫌われる若者はいったい何者なのだろうとドワーフたちが思っていると、視線を全く気にしていないどころか嫌そうな顔にすらまったく気づいていないKYな若者が、ごくごく丁寧に名乗りました。

「はじめまして白雪姫。ぼくはナイカルシ帝国の国王紺暮コングレの息子で、青晴アオハレというんだ。姫はどうやらぼくの国の人じゃないみたいだけれど、もしかしたらナイカホアの人のかな？」

なんと王子様でした。しかもおそらくは、白雪の祖母に当たる朱雲女王に堪忍袋の緒を自主的に切断させた藤空国王のお孫さんに当たるようです。それはまあ血脈の関係上、生理的嫌悪を感じても仕方ないかもしれません。恐るべきは二重螺旋にまで嫌悪感を刻みこんだ藤空国王のしつこさです。あんまりにも前のこと過ぎて覚えていない皆さんは前話を参照してください。

しかしこれは困ったことになりました。隣国ナイカルシ帝国と、白雪の属するナイカホアは、現在一触即発の状態にあります。それというのもこのお頭のメルヘンな王子のおじい様がしつこすぎるストーリーカーを演じてくれたおかげで白雪のおばあ様が隣国に思いつき喧嘩売ってしまい、それが原因であほな王族についていけない大臣たちが喧嘩を買ったためです。

もしナイカホアの人間だと分かれば、とっ捕まって拷問されたり、或いはこれを引き金に国家間戦争になってしまいかもかもしれません。正直白雪にとって、国がどうなろうと知ったことではないのですが、さすがに自分がそれに巻き込まれるとなると慎重にならざるを得ません。いくら一見アレな王子でも、判断を誤れば危険なのかもしれません。すでにいろいろやった後ですが。

「きつとそうだよねえ、だったらおじい様の言うとおりだね。朱雲陛下はとても美しかったそうだから、ええと、白雪はそのお孫さんなのかな？ うん、とってもきれいだね。どうかな、ぜひぼくと一緒に国に来てくれないかな、お父様もおじい様も喜ぶと思うから。あ、なんだったらご家族をお呼びして、パーティでもしようか？」

………大丈夫かもしれません。国家間の緊張などどこ吹く風で、へらりとしています。王族が阿呆なのはどうやら先祖代々変わっていないようです。そのくせ実権はしっかりと握ったままなのですから、恐ろしいと言えば恐ろしいのですが。なににせよ、この王子が

白雪に好意的であるということは、大臣たちがなんと言おうと彼が抑えつけてしまうでしょうから、戦争の引き金になるようなことはないでしょう。

いいことづくめのはずなのに、このメルヘンヘッドに好意を持たれていると思うだけで言い知れない不快感がわいてくる白雪はどうしたらいいのでしょうか。

「ね、ね？ いいでしょ白雪。ぼくはすっかり君の美しさに一目ぼれしてしまったようなんだ。こんなところで出会えたのもきつと僕らの運命だよ」

いやに気さくに話しかけながら顔を寄せる青晴に、何とかこらえようとしていた白雪の自制心は、じつにあっさりと限界を迎えて、思いつきり体重をかけた右ストレートが青晴の頬に突き刺さり、まともや見事な空中きりもみ回転を見せてくれました。

しかし地面を数回ごろごろ転がったかと思うとまたもやけろりと立ち上がって、笑顔で話しかけながら接近してきます。

白雪は今度はもう耐える気もなく、最初から全力で回し蹴りをぶちかました。

青晴は今度もまた吹き飛ばされて、空中きりもみ回転を見せつけてくれました。そして立ち上がってきました。

白雪は黙らせようと、スクリーアッパーをあごにねじ込みました。

青晴はまた吹き飛ばされて地面と激しくダンスしましたが、笑顔で立ちあがって話しかけてきます。

白雪はもう殺すつもりで頭をわしづかみにして地面に頼ずりさせ、百メートルほどその状態で走ってみました。

青晴は地面に激しく頼ずりさせられててっきり紅葉おろし状のナニカになると思いきや平気でピンピンしていました。

白雪は殴り飛ばしました。

青晴は笑顔で復活します。

白雪は殴り飛ばしました。

青晴は笑顔で復活します。

白雪は殴り飛ばしました。

青晴は笑顔で復活します。

白雪は殴り飛ばしました。

青晴は笑顔で復活します。

白雪は殴り飛ばしました。

青晴は笑顔で復活します。

白雪は殴り飛ばしました。

青晴は笑顔で復活します。

白雪は殴り飛ばしました。

青晴は笑顔で復活します。

白雪は殴り飛ばしました。

青晴は笑顔で復活します。

これを延々と繰り返す二人を遠巻きに眺めて、ドワーフたちはこの異様な光景に困惑していました。

表情を変えることもなく、徐々に返り血の量を増やしながら殴り続ける白雪のスプラッタホラ　な恐怖と、どれだけ殴られても平気でかつ笑顔で立ちあがってくる青晴のゾンビ的な恐怖、この二つが同時に存在することで、シュール極まりない景色ができていました。細かい描写をするとすぐにも検閲の餌食となりかねないこのシーンに関しては、自重に乏しいこの物語においても、僭越ながらカットさせていたきたい。

さてこの不毛な繰り返しを30回1セットとして12セットほど繰り返し、野に咲く可憐な花々がごとく赤くなつたころ、肉体的にか精神的にか疲れたらしい白雪が手を止め、青晴はにこにこ「照れ屋さんだなあ」などとのたまいもう一度殴り飛ばされ、ようやく止めに入つたドワーフたちのお陰でやっと一区切りつきました。さすがの白雪も、この不死身かと思えるほど無駄に頑丈な、ギャグキャラ補正じみた耐久性を誇る青晴王子に辟易したらしく、心を鎮めるべく深く深く深呼吸しました。ドワーフたちもこのまま放つてお

いて庭にルミノールをまいただけで灯りが不要になってしまような状態になるのはいただけないと、青晴を適になだめすかして白雪へと向かわないように腐心しました。

「ええい、くそ、なんだってんだ！」

グランビーが隅っこでひそかに愚痴りました。

「まあまあ、奴らもいつまでもいるわけではないだろう」

ドクが慰めますが、そんな保証はありません。すぐにでもいなくなつて欲しいのです。

ドワーフたちもそれがわかっていきますから、大きなため息をつきました。

「やれやれ……誰か何とかしてくれないものか……」

「ふむ、そうだね。さすがにこのままでは物語も收拾がつかないからねえ」

「まっただ……え？」

あまりに自然に会話に紛れ込んできたのでついつい相槌を打ってしまいました。間に一人、見知らぬ人物がいました。

「いやはや、我が義娘ながら乱暴で困るね。どれ、私が何とかしようじゃないか」

あたかも最初からいましたよとでも言うように、しれっとした態度の黒霧の姿がそこにありました。

何者やらわからない、ただちよつと白雪と共通する雰囲気のある魔女の姿に、ドワーフたちはぎょつとして、白雪も警戒心たつぷりに身構えました。唯一平然としているのはKYの青晴王子だけで、彼はただひとり、ウフフアハハと小鳥と戯れていました。

「……先ほどはよくもやってくれたな」

「いやいや礼には及ばないよ、我が義娘、白雪姫」

敵意たつぷりの白雪に対して、黒霧は相変わらずまともに相手をしません。そして果物屋の店先で、どの林檎がいい林檎だろうかと品定めするように、ごく自然に状況を見まわして、言いました。

「ええと、このシチュエーションは何だったかな……そうそう、

『白雪姫は王子様と末長く幸せに暮らしましたとさ』といったところかな」

黒霧の突然のわけのわからない発言に、ドワーフたちは首をかしげました。白雪も全く意味がわからないらしく、出方をうかがっているようです。

そんな白雪をあざ笑うように黒霧がもったいぶって指を鳴らすと、がしゃん、と白雪の首に魔法の首輪がかかっていました。ご丁寧に毒りんごマークつきです。

「……………なんのつもりだ」

相変わらず読めない黒霧の行動にいらつきながら、白雪は首輪をはずそうと手をかけました。

力を込めます 壊れません。

思いつき力を込めます 壊れません。

魔法で壊そうとします 使えません。

ここまで挑戦して、ようやくこの首輪が白雪の力をすっかり奪ってしまったことに気づいて、白雪は忌々しげに黒霧をねめつけました。

「さつさと外せ。でなければ……………」

でなければ、と脅そうにも力が失われてしまっているので、睨まれたところで痛くもかゆくもありません。

黒霧は楽しそうにそんな白雪の姿を眺めて、もう一度言いました。

「『白雪姫は王子様と末長く幸せに暮らしましたとさ』」

「……………ッ!？」

少し考えて、そしてがっしりと後ろから肩をつかまれて、白雪は悟りました。この二重螺旋が全霊を持って拒絶する、生理的嫌悪感。青晴がこれ以上ないくらい素晴らしくうざったい笑顔で肩越しに見つめていました。殴り飛ばそうにも、ペしりとよわよわしく拳が当たるだけです。そしてその拳も青晴に優しく手に取られて、ぞわぞわと全身に鳥肌を立たせるだけでした。

「『白雪姫は王子様と末長く幸せに暮らしましたとさ』」

「な……、待て、すぐ、すぐに外せ！」

珍しく、というよりは恐らく初めて焦りをはっきりと見せて、怒鳴る白雪でしたが、時すでに遅し、黒霧は実に楽しそうに白雪を眺めながら、ゆらゆら消えて行ってしまったところでした。残ったのは呆気にとられたドワーフたちと、全身鳥肌を立たせて生理的嫌悪に耐える白雪、そしてハートフルすぎてうざい笑顔満開の青晴だけでした。

「さあ、白雪姫！ さっそく城に向かおうか。きっとみんな喜んでくれるよ。だってこんなに空が青いんだもの。だってこんなにおひさまが笑っているもの」

「離せ！ は、離せ……ッ！」

拒絶もむなしく、力をすっかり失ってしまった白雪は、強引グマイウエイな青晴によって、ずるずると引きずられて行ってしまうした。

そうして、残ったのはドワーフたちだけ。

そのドワーフたちも、しばらくは茫然としていましたが、やがてのそのそと小屋へと戻っていきました。

そして残ったのは虚しい木枯らしだけ。

そして誰もいなくなった。

すこし後、ナイカホアとナイカルシ帝国の停戦協定と、そして両国の王姫と王子の盛大なる結婚式のニュースが森にまで届くことになったのですが、それはまた別のお話。

締めくくりはやっぱりこの言葉。

白雪姫は王子様と末長く幸せに暮らしましたとさ。

めでたし、めでたし。

Doc (後書き)

小説系ブログ「スナーク狩りにも雨は降る。」もございます。
興味のある方は是非そちらもご覧ください。

URLは<http://d.hatena.ne.jp/rainyshrine/>です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3846d/>

白雪姫 R

2010年10月8日14時28分発行